跡見学園女子大学文学部紀要　第 50 号　2015

Sense and Sensibility：sense と sensibility の在処

Sense and Sensibility：Where sense and sensibility are

内藤　歓修

Kanshu NAITO

要　旨

ジェイン・オースティンの最初に出版された本作品 *Sense and Sensibility* は、ほぼ同時期に代表作 *Pride and Prejudice* と並行して書かれていたようである。*Pride and Prejudice* と同様に 2 つの概念を並列した題名が付いているが、sense と sensibility の意味が近似のために相対立する概念として明確には読者に迫ってこない。

sense を代表する姉 Elinor と sensibility そのものというような妹 Marianne は困難を経験して、良縁に到る。過剰な感情表出をしてはばからない妹は、周囲を騒動に捲き込んだ末、姉の sense の援助を得て自己覚醒し、人格的成長を見る。しかし、姉もただ sense を体現するだけで、感情を表すことがないということはない。

2 人の主人公と取り巻きの人々を含めて、作品の表題になっている sense と sensibility の在り方を考察した。

「結婚」はどの時代においても、手強い問題を孕んでいる。男女間の多くの問題、人間の根本的な問題が凝縮されているとも言えよう。男女が互いに愛情を抱き合って結婚を考えても、本人たちの背負っている様々な社会的背景の違い、即ち、仕事、経済力、家庭環境、趣味、ものの考え方など種々雑多な違いを念頭に置きながら、結婚を決断しなければならない。愛よりも経済問題や相手の社会的地位を重視して結婚を決めることもあろう。

現代でもこの様な問題は安易に看過できにくいのに、ジェイン・オースティンの生きた時代、18 世紀後半から 19 世紀初頭の時代では、社会は男性に支配され、男性に有利に出来上がっていた。B. C. Southam(1)は当時の結婚は愛とではなく、社会と結び付いていたと、男性中心の社会における女性の立場の悲惨さを述べている。結婚生活でも女性の立場は受動的、隷属的で、その役割は社交界のアクセサリーで、家庭の憩いであり、男性の付属物であった。結婚できなければ、未婚の老嬢で終わるか、職業に就くなら、家庭教師か学校の先生になるしか道はなかった。それ故、年頃の娘本人やその親に

とって良縁は重大問題であり、その人々が属する社会では最大の関心事であった。結婚は女性の一生を根本から変えてしまう程の人生の重大事とならざるをえなかったと言えよう。

この様な時代であれば、上層中流階級に属していた若い女性であったジェイン・オースティンにとって結婚は最大の関心事、生活の大問題であったことは、想像に難くない。日常の身近な、ありふれた事柄を取り上げ、物語を紡いでいった、オースティンが最初の長編小説から最期の作品まで結婚を主題にし、結婚にまつわる問題から離れなかったことは当然の流れであった。

オースティンはスティーヴントンに住んでいた 1794 年頃、書簡体小説(2)Elinor and Marianne(3)という作品を書き始め、2 年後の 1796 年に終了するが、後年、納得のいくまで、何度も書き直し、完成作品に仕上げていったようである。後に、安住の地チョートンに定住するようになって、本腰を入れて作家としての活動に取り組み始め、*Sense and Sensibility* は出版直前の 1809 年から 10 年頃まで、手を入れられている。1811 年に *Sense and Sensibility*(4)はロンドンの Thomas Egerton 社から自費出版された。原作の持っていた書簡体小説の形は廃棄され、物語として筋の自然な流れを持つ作風になっている。だが、原作の生硬な筋の運びは充分には改善されておらず、Walton Litz が指摘するように、「後年、つぎはぎされた若い頃の作品」(5)という印象をぬぐうことができないのも確かである。

Sense and Sensibility は元原稿が Elinor and Marianne と言われている。姉妹である 2 人の女主人公の名が作品の題名になっていて、姉の Elinor Dashwood が sense を代表し(6)、妹の Marianne が sensibility を具現化する女性と言われることが多い。

常に、分別である sense に基づいて考え、行動をし、感情を制御する Elinor は、堅実な観察力を備え、相手の性格を見極める洞察力に優れている。しかし、外見上慎重で、冷静に物事に対処するという欠点のなさに、却って人間味が薄れ、周りには、精彩がなく、魅力に乏しい印象を与える。むしろ、その魅力は Marianne に付与されている。多感で、帰属する社会の規範からはみ出る行動を自分の気持ちに素直に従って、衝動的に起こし、周囲の者を混乱に捲き込む。Elinor と Marianne の物語を考察するのに sense と sensibility という言葉は抽象的な観念としてだけ理解されるものではなく、具体的な心理や行動を通して捉えられ、評価されるものである。その場合、生活の舞台である現実を、どのように認識するかが前提条件となる。オースティンは当然この点を十分意識し、認識していた。作者の住む社会の現実は、堅固な経済制度と確立した秩序によって揺るぎない構造を持つ、枠を嵌められた社会であった。

物語はまずこの領地の先代の所有者のことから始まる。Dashwood 家はサセックス州、ノーランド荘園の名門である。先代の甥 Henry Dashwood は 1 人暮らしをしていた先代を慰めるために同居している。Henry には後妻との間に 3 人の娘がいるが、家族に残してやれる財産は 7 千ポンドしかない。一方、先妻との間に息子 John がいて、成人に達したとき、母親の莫大な遺産の半分を受け継いでいる。

先代が死んで、遺言状が開封されると、ノーランド荘園は Henry の在世中は Henry のものとなるが、その死後は、今の妻との間の、Elinor、Marianne、Margaret にそれぞれ 1 千ポンドが遺贈されるだけであった。すると、後に残される妻と娘たちには 1 万ポンドしか残らない。家族の行末を案じた彼は今わの際に、John に彼らのあとを頼むと懇願し、John はそれを約束した。

Henry の喪が明けるやいなや、母娘の生活は激変し、大幅な縮小を余儀なくされる。John Dashwood の妻 Fanny は早ばやとノーランド荘園に乗り込んで来た。一家 4 人はたちまちにして居候の地位に転落する。強い感受性の持主 Mrs. Henry Dashwood は Fanny の思い遣りのなさに腹を立てて、すぐにも立ち退きたいと主張する。慎重な長女 Elinor は、落ち着いて考えるのが大事であると母を諭し、John Dashwood 夫妻との決裂をさける。Elinor は感情を抑え、冷静に対処し、不利な状況を更に悪化させることのないように身を律している。この困難の時に、オースティンはこの家族の性格を的確に紹介する：

Elinor, … possessed a strength of understanding, and coolness of judgment, which qualified her, though only nineteen, to be the counsellor of her mother, and enabled her frequently to counteract, to the advantage of them all, that eagerness of mind in Mrs. Dashwood which must generally have led to imprudence. She had an excellent heart; - her disposition was affectionate, and her feelings were strong; but she knew how to govern them; it was a knowledge which her mother had yet to learn, and which one of her sisters had resolved never to be taught. (I, i)(7)

Elinor は困難な場合の対応方法を既に会得し、忍耐、理性、礼儀などの価値を理解している。これからは実践の場でどう生かしていくかが、彼女の課題となる。分別の勝る Elinor ではあったが、必ずしも、冷たい人柄故の冷静さを保持しているわけではない。情愛が深く、感情が激しい面も有しているが、感情を制御することを心得ているのである。一方、Marianne は姉とは好対照をなしている：

Marianne's abilities were, in many respects, quite equal to Elinor's. She was sensible and clever; but eager in every thing; her sorrows, her joys, could have no moderation. She was generous, amiable, interesting: she was every thing but prudent. The resemblance between her and her mother was strikingly great. (ibid.)

Marianne にも分別が備わっているし、Elinor にも豊かな感情がある。2 人の性格は根本的には異質のものと言うより似通った所が多い。ただ、姉が"the excess of her sister's sensibility" (ibid.)を心配しているように、Marianne は心の在り方が常に sensible な状態に大きく傾いていることが姉と大きく異なっている。人間的に寛大で、魅力的ではあるが、感情に歯止めがきかず、思慮深さに欠ける。

となると、2 人の間には、思慮深さがあるか、自己の感情の発露を社会が許す範囲内に留めておけるかという性格的属性に大きな違いがあると言えるであろう。この 2 人が幾つかの困難に遭遇した際、sense「分別」と sensibility「多感」の特徴をどう表して、それらに立ち向かい、乗り越えていくかが、物語の核心となっている。即ち、分別の Elinor と多感の Marianne の感情や行動を対比して、そこに、分別と感情の程よく均衡の取れた生き方を示そうとする主題が明確に示される。

第 1 章で作者は詳細に登場人物の経済状態を説明している。どの階級においても、経済は生活基盤の最重要な要素である。この一般論としての経済論議を下敷きにして、作者は個人の経済観念を問題にしている。第 2 章では John Dashwood 夫妻の経済観念を示しながら、彼らの人間性まで露わに見せている。2 人の経済的エゴイズムが見事に戯画化されている。ノーランド荘園を去る母娘に如何ほどの援助をすべきか、John と Fanny は言葉巧みに、我欲を満足させる議論を進めている。

元々利己的で気弱な John は欲の深い妻 Fanny に言いくるめられていく。彼ら夫婦の経済的抜け目のなさ、言ってみれば economical sense がここに明確に浮かび上がっている。John は亡き父に援助を呉々も頼まれたが、最初の援助の案を徐々に縮小していき、結局、家探しや引っ越しの手伝いをしたり、時々肉や魚を贈ることで、話しは決着する。潜在していた金銭至上主義が露出して、父との約束を反故にし、家長としての責任を回避してしまった。この割り切った経済観念は到る処で表出し、利己主義的な行動に撤している。

Mrs. Dashwood 一家がバートン・コテージに移り住むまでの期間、姉 Fanny のもとに遊びに来ていた Edward Ferrars と Elinor の間に愛が芽生える。彼らの愛情は 2 人の性格を反映して、地味で控えめである。

Edward は男性の魅力が際立っているわけではない。too diffident to do justice to himself ではあるが、an open affectionate heart(I, iii)の持ち主である。Mrs. Ferrars も Fanny も彼に政界入りするなど、世間で頭角を現してもらいたいと過大な期待をかけている。しかし、作者も否定しているように、それは彼の生き方ではなかった。Edward は聖職に就きたいと考えているが、母親の反対に遭い、目下、無為徒食の身に甘んじている。

sensibility の勝つ Marianne の Edward に対する見方は厳しい。彼には音楽や絵といった本質的な意味で趣味がない。詩を朗読しても、単調でその感動がこちらに伝わってこない。His eyes want all that spirit, that fire, which at once announce virtue and intelligence. (ibid.)と批判する。その批判に対し、I venture to pronounce that his mind is well-informed, his enjoyment of books exceedingly great, his imagination lively, his observation just and correct, and his taste delicate and pure. (I, iv)と Elinor は常日頃の冷静な態度と異なり強く彼を弁護する。彼は美についても過度な感情移入はなく、客観的な評価を下し、実用性が備わった美を尊重する。Elinor が Edward に親近感を抱くのは、Elinor に同じような傾向があるからに他ならない。彼女は主観に極端に偏らず、より冷静な判断力を維持して、社会規範や慣習に十分配慮した行動をしている。彼女の sense（分別）に基づく客観的

行動様式が、Edward のものの考え方と通底していることが互いを惹き付けた大きな要因となっている。一方、Marianne は道徳的判断をするのにも、自己の直観的、主観的判断に過大な信頼を置き、公平性を欠いている。

Dashwood 母娘がバートン荘園内の小さな住居バートン・コテージに落ち着くと、所有主の Sir John から、妻の Lady Middleton、彼女の母親の Mrs. Jennings、Sir John の友人 Colonel Brandon たちに引き会わされる。Sir John は人の良さそうな、40 歳くらいの大地主で、大勢の男女を集めてパーティをすることを楽しみにしていた。妻の Lady Middleton は、26 か 27 歳くらいの感情を欠いたような、反応の鈍い、優雅で、気取った女性である。陽気過ぎる夫と気取った妻の対称的な性格を持つ夫婦である。

Dashwood 一家はバートン・コテージへの引っ越しの際には、必要最小限のものを除いて、殆どのものを手放してしまった。その中でも、家と馬車の喪失は重要な意味を持つ。社会生活の中で、人間は多かれ少なかれ他人の目を意識して行動しなければならない。家庭とは、本来の自分と異なる社会的な活動をする自己から離れ、休息をとり、内省し、自己を回復するための場所であろう。すると、家を失った Elinor たちは本来の自己に戻る空間を奪われ、常に社会的自己を維持していかなければならない。また、自分の馬車を持たないということは誰かに同乗させてもらわない限り移動手段は徒歩になり、行動できる範囲が狭くなることを意味する。Dashwood 一家に家や馬車を提供するのは家主の Sir John と Mrs. Jennings である。必然的に Elinor たちは精神と行動の自由を Middleton 一家に押さえられることになり、絶えず彼らに注視され、プライバシーを保つことが難しい。オースティンの観察は空間の物理的距離だけではなく、人間間の精神的距離にも及ぶ。

Sir John の友人 Colonel Brandon は silent and grave で、ハンサムではなかったが、his countenance was sensible, and his address was particularly gentlemanlike. (I, vii) と言われる中年の紳士である。彼は会ったときから、Marianne に関心を持つが、17 歳の多感で情熱的な彼女は 35 歳の彼を年寄り扱いして、歯牙にも掛けない。

こうした中、Marianne の前に Colonel Brandon と多くの点で対称的な特徴を持つ Willoughby が現れる。違いが性格だけでなく、生き方や人生態度にまで及んでいる。お金に関しては利己的な sense を発揮する Willoughby に対して、大佐は誠の心情を重んじる sensibility の人である。彼らの際立った対称性はオースティンによって周到に練り上げられている。25 歳で輝くような若々しい魅力を備えている若者と落ち着き払った中年男性。際立つ対称性をもっての登場である。想像力豊かな Marianne は大佐がフランネルのチョッキの話をしていたことを聞き漏らさず、大佐を老人や病人扱いしている。彼女の想像力の際限のない飛翔を抑制するのに彼ほど適任である男性はいないのだが、このときの彼女は未だ彼の真価を見出せる能力を備えていない。その能力を獲得するには、大きな試練を乗り越えなければならなかった。その試練は魅力的でロマンティックな姿をして、現れる。

Willoughby の登場の仕方は、ロマンティックな Marianne の心情を激しく揺さぶり、彼女を夢中

にさせるのに充分であった。ある日、Marianne は散歩の途中で雨に遭い、走って帰ろうとしたとき、転んで、足首を捻挫して歩けなくなる。その時、2 頭の狩猟犬を従えた Willoughby が偶然に現れ、Marianne の身体を抱え上げ、コテージまで運んでくれた。Willoughby は美男子であり、立ち居振る舞い、言葉遣いも申し分なかった：

His person and air were equal to what her fancy had ever drawn for the hero of a favourite story; and in his carrying her into the house with so little previous formality, there was a rapidity of thought which particularly recommended the action to her. Every circumstance belonging to him was interesting. (I, ix)

彼は風采がよく、good abilities, quick imagination, lively spirits, and open, affectionate manners (I, x)を備えていて、音楽の才能もあり、詩の朗読もうまく、立ち所に Marianne の心を捕らえてしまう。しかし、彼への賞賛は外見に限られていて、内面的な言及がない。

Marianne は常々理想の男性像について：

I could not be happy with a man whose taste did not in every point coincide with my own. He must enter into all my feelings; the same books, the same music must charm us both. (I, iii)

と言っている。彼とは、ダンスと音楽の趣味が一致したばかりでなく、愛読書が同じであり、感激した条りまでがぴったりと一致している。彼は形式に囚われず思ったままを語り、考えのままに即行動にでき、彼女が感心するものを同じように夢中になって感心してくれる理想の恋人であった。Marianne が求める情熱的な愛とは結局、自己愛の裏返しとも言えよう。

この理想的恋人関係は、実際には、Willoughby が Marianne に趣味を合わせているということがあちこちに垣間見えている。彼は自分の本性を隠して言葉巧みに Marianne に取入り、真の恋人のごとくに振舞っている。同じものを同じように喜び、心酔して、あっという間に彼女の心を魅了してしまった。

交際が深まるにつれ、2 人が持つ特徴も露わになってくる。Marianne は積極的で大胆であり、自分の内面的基準を絶対とし、他人の意見に耳を貸さず、一途に進むところがある。Willoughby は彼女の趣味や主張に常に同調し、思う存分、情熱的な好き嫌いの気持ちを表現する。彼女の分身のごとく Marianne を夢中にさせる。この虚構の理想世界で夢のような時間を過ごす 2 人は、Marianne の目には完全無欠に写る Willoughby も、冷静な観察者である Elinor の目には次のように写る：

Elinor saw nothing to censure in him but a propensity, in which he strongly resembled and

peculiarly delighted her sister, of saying too much what he thought on every occasion, without attention to persons or circumstances. In hastily forming and giving his opinion of other people, in sacrificing general politeness to the enjoyment of undivided attention where his heart was engaged, and in slighting too easily the forms of worldly propriety, he displayed a want of caution which Elinor could not approve, in spite of all that he and Marianne could say in its support. (I, x)

Elinor の Willoughby に対する批評は Marianne にもそのまま当てはまる。彼らは自分たちだけの世界に没頭し、楽しみに熱中して、周りの人への配慮が全くなく、人びとの非難を浴びるが反省する気配も見せない。心配した Elinor は妹に少し自制をするように忠告するが、妹は率直さは別に恥ではないとして、隠し立てすることを一切嫌った。素直な感情表出を抑えようとするのは、彼女から見れば、無用の努力であるばかりか、誤った観念への理性の不名誉な屈服であった(8)。

2 人の感覚的で理性を弁えない考えが顕著に表われているのはアレナム・コートへの訪問である。皆で Colonel Brandon の義兄の所有になるウィットウェルを見学する予定を立てたが、出発の当日、大佐が突然の所用でロンドンに行かなければならなくなったので、見学が中止になる。皆が大佐を引き止めたり、見学できるように管理人に手紙を書いてほしいと懇願したりするが、彼はきっぱりと断り、皆の不興を買う。彼の同行なしには，屋敷に誰も入れないという持ち主の気持ちを尊重しているからである。

人に対する信義を大切にする大佐の態度と対称的なのが、Willoughby の行動である。この混乱に乗じて、彼は Marianne を滞在先であるアレナム・コートに連れて行く。所有者の Mrs. Smith に許可を受けることなく、突然秘密裡に、邸宅を見て廻った。思い付きと気紛れに動かされ、他人への配慮が全く欠ける行動である。信義を尊重し、他人への配慮を欠かさない大佐と自己中心的な欲望に従う Willoughby の行動様式の相違は際立っている。

Marianne も彼と行動を共にし、未だ相続していない先から将来の計画をし、婚約もしていないのに周囲の誤解を招くような不用意で、淑女にあるまじき行動を取った。Elinor はこのことを聞くと、若い女性が男性と 2 人きりになると誤解を招くと忠告し、彼女に反省を促すが、彼女は悪いことをしているときは必ず分かるものだと強弁する：

"…if there had been any real impropriety in what I did, I should have been sensible of it at the time, for we always know when we are acting wrong, and with such a conviction I could have had no pleasure." (I, xiii)

善悪を決めるのは世間の規範や礼儀ではなく自分自身である。自分には判断力が備わっているので間

違いを犯すはずがないと、Marianne は自己の判断力を絶対視して疑わない。彼女と Willoughby は周囲の目も気にせず自らの感情だけに忠実に行動し、持てる sensibility の力を最大限に発揮している。彼との恋愛は彼女の sensibility に一層油を注ぎ、遂には彼女を破滅の一歩前まで追込んでしまう。

Elinor と Marianne の姉妹がそれぞれ恋人を得たときから、sense と sensibility の相違、その底に流れる精神面の相違が現れてくる。姉妹ははっきりお互の考え方が根本的なところで対立していることを意識し始める。Marianne は自己の本質的な善への確信、自己の精神能力に対する楽天的な認識から、自主性を重んじている。姉の sense の立場こそ、他人の意見や判断に無条件に屈従しようとするもので、理性的な生活態度ではなく自主性の喪失ではないかと考える。Elinor はその非難に答えて、sense は決して他人への盲従ではなく、実生活を理性的、自主的に処理する態度であると反論する(I, xvii)。

Elinor と Marianne が対称的であるように、その恋人たち Edward と Willoughby も対称的な存在であり、姉妹の戯画をなしている。Elinor と Marianne は互に意識していなかった、或いは意識するのを拒否していた自分たちの欠点を各々の恋人たちに見出す。Marianne は Edward の無趣味、無気力な退屈さに殆ど我慢がならないし、Elinor は Willoughby の才弾けた軽薄さに危惧を感ぜずにはいられない。2 人の恋人は Elinor と Marianne の特性である sense と sensibility の持つ欠点を極端にデフォルメした姿を示している。過度の sense を備えていると、外見上個性のない、無気力な人に見え、sensibility 過多であると、感情が先に立ち、理性や分別が効かない危うい人格を暴露してしまう。

Colonel Brandon が発った約 1 週間後、今度は Willoughby が突然、慌ただしくロンドンに去ってしまう(I, xv)。実は大佐の場合は保護者になっている Miss Williams の危機を救うためであり、Willoughby には Marianne を捨てて、金持ちの女性と結婚することで、自分の生活の安定を得るという利己的な目的があった。

最初、Elinor は Willoughby と Marianne の交際を温かく見守っていたが、彼らが急速に親密になり、自分たちだけの世界に閉じ籠もってゆくのを心配し始める。2 人が人目に余る愛情表現を続けているなか、彼は理由も言わず、帰って来る日も告げずに、突然バートンを去ってしまった。そのときの様子が不自然でぎこちなかったので、Elinor は彼が本気で Marianne を愛していたのかどうか疑わしく思い、不審を抱く。彼は本当は Marianne に結婚を申し込む気などなく、彼女の心をもて遊んでいただけではないかと懸念する。Elinor の優れた判断力は的確に人の価値を識別し、Marianne のようにたやすく欺かれることはない。

Willoughby が去って 1 週間程したある日、Edward がバートンにやって来る。前回会ったときより元気がない風情でよそよそしい態度を崩さず、Elinor を避けている様子でさえある。こうした彼の態度を見ると、Elinor は彼の愛情に不安を感じざるをえない。彼が Elinor を愛しているというはっきりした証拠は実際何もない。Elinor は彼の鬱々として楽しまない態度の理由は Mrs. Ferrars が彼の将来に干渉をしているからであろう、などと憶測するしかない。彼女は sense を最大限に発揮して、

この不安に対して表面は平静さを保つ。

Edward が薄い色の髪の入った指輪を付けているのに気付くが、誰のものかも分からずに、あえて自分の髪の毛だろうと想像して、良い方に考え、自らの慰めとする。他の女性の存在を疑うこともしない。sense に行動の基盤を置く Elinor でも肝心の自分の恋では冷静かつ客観的に相手を観察できずに sensibility に基づく主観的思考から逃れられない。Elinor の彼への愛は一目惚れに近く、Marianne の Willoughby に対する愛情と酷似している。

Edward が去って暫くすると、Mrs. Jennings の遠縁の Anne と Lucy の Steele 姉妹が Sir John にバートン荘園に招待され、滞在するようになる。姉の Anne は浅はかで、妹の Lucy は垢抜けて、礼儀正しいが、計算高いようである。彼女らとの交際が進むに従って、Edward のよそよそしい態度の理由が明らかになってくる。

Lucy は監視能力に加えて性的魅力を持っていた。自分にとって役立つ人間を瞬時に判断し、結婚相手になりそうな男性には性的魅力を振り撒き、利用できそうな女性に対してはなりふり構わず追従し、いつのまにか籠絡する手並みは際立っていた。Sir John 夫妻、John Dashwood 夫妻、Mrs. Ferrars に上手に取入り、彼らの警戒心や監視を和らげ、Elinor に対抗する。

その試練は突然やって来た。Lucy は、Elinor が Edward を愛していると知ったので、嫉妬し、2 人の仲を裂く意図で、彼女に Edward との秘密の婚約を打ち明ける。証拠を挙げつつ、婚約の事実を証明してゆく。彼女がどのように動揺するかを確かめつつ、告白を続ける。Edward がオックスフォードに行く前に、Lucy の叔父の Mr. Pratt のもとで個人教育を受けたときに、2 人は婚約したが、貧しい Lucy との結婚を許すはずもない Mrs. Ferrars を恐れて、4 年間秘密にしていると言う。Edward の指にはめられていた女性の髪の毛が編み込まれた指輪は Lucy の贈り物であると言われ、Edward と親密な関係にある者でしか知るはずのない話を次々と聞かせられたとき、Elinor は 2 人の婚約は疑いようのない事実と認めざるを得なかった。

Lucy に対する受け答えのとき、Elinor は、a composure of voice, under which was concealed an emotion and distress beyond any thing she had ever felt before を要求され、She was mortified, shocked, confounded. (I, xxii)という辛い気持ちに追い込まれる。狡猾な Lucy に決して心の動揺を見せまいと必死に自制し、この窮地によく耐える。この後、Elinor は自らの力では如何ともなし難い、この事実を卒直に受け容れようと決心する。家族に心配させないよう、また世間の噂話や無用の憐憫から自分を護ろうと、悲しい顔 1 つせず平静さを装い普段通りに振舞う。Elinor の sense はこの危機において申し分なく発揮されている(9)。

Elinor は遠回しながら的確な言葉で渡り合う。強引に秘密を共有させられたことに関して：

“I certainly did not seek your confidence…but you do me no more than justice in imagining that I may be depended on. Your secret is safe with me; but pardon me if I express some surprise at so

unnecessary a communication. You must at least have felt that my being acquainted with it could not add to its safety." (ibid.)

と、はっきり言い、相手の企みを見破ろうとするが、 Lucy は言葉巧みに自己弁護して、追求をかわす。2 人は、表面上は礼儀正しく穏やかに会話を続けながら、相手の言葉と表情に神経を集中し、相手の真意を知り自分に有利な情報を引き出そうとする。Elinor は Lucy を観察すると同時に、自分も観察されていることを強く意識する。Edward の愛に自信が持てず、Edward と Lucy の関係については当の恋敵からの情報しかないため、この戦いは不利であった。

Lucy は Edward の収入について、私は a very small income に慣れているから貧しい生活にも耐えられるが、彼が私との結婚で母に財産を分与されないのは、大変気の毒だと言う。Elinor は、愛と金銭を秤に掛けるような言い分は矛盾していると気付き、Lucy の Edward への接近が欲得ずくであることを見抜く。彼女が彼との愛は不変であると強調すると、Elinor は：

"That conviction must be every thing to you; and he is undoubtedly supported by the same trust in your's. If the strength of your reciprocal attachment had failed, as between many people and under many circumstances it naturally would during a four years' engagement, your situation would have been pitiable indeed." (II, ii)

と注意深く皮肉を籠めて言う。更に、Elinor は"…have you none but that of waiting for Mrs. Ferrars' death, which is a melancholy and shocking extremity?"と単刀直入に尋ねる。財産がなければ「Edward の為に」心配だという Lucy の言葉を利用して、 "And for your sake too, or you are carrying your disinterestedness beyond reason."とすぐに言い返す。これにはさすがの Lucy も言葉を失ってしまう。溜め息をつき、「このような状況では婚約を解消するのが賢いのでしょうね」などと心にもない問いかけをする Lucy に、心の動揺を隠すために、Elinor は"You know very well that my opinion would have no weight with you, unless it were on the side of your wishes."と強烈な皮肉と共に言い返す。表面上穏やかな遣り取りの下に、火花の散る感情の戦いが繰り広げられているのである。

ここで、Lucy が Elinor だけに秘密の婚約を打ち明けると言い、如何にも良き忠告を求める友を装いながら、 Elinor への嫉妬心を燃やし、同時に婚約者としての自分の優越感を満足させ、Elinor を Edward から遠ざけようとした意図は充分に達せられた。

「婚約の秘密を守る」という Lucy との約束に縛られ、Elinor はただ 1 人この試練に耐えなければならなかった。辛い立場に追い込まれても挫けない彼女の強さは次のように説明されている：

She was stronger alone, and her own good sense so well supported her, that her firmness was

as unshaken, her appearance of cheerfulness as invariable, as with regrets so poignant and so fresh, it was possible for them to be.（II, i）

感情に支配され易い母親や妹のもとではむしろ「1 人の方が強かった」という Elinor の堅固な性質は彼女の分別に支えられ、如何なる状況にも耐えてゆけることが示唆される。Elinor と Marianne の各々の恋人を巡る受難は、最終的に 2 人に耐え忍ぶことを教える試練になっている。姉妹は共に恋愛と今後の人生に悩むのだが、2 人の対処の仕方は全く違っている。Elinor は義務を遵守することを何よりも大切にしているので、他人へ配慮し、一家が平安に暮らせるように、自分の襖悩については一言も洩らさない。Marianne は感情を包み隠すことがなく、いつまでも Willoughby に執着し、その感傷性は周りの者たちを心配させている。

冬をロンドンの社交界で過ごそうとしていた Mrs. Jennings は、Willoughby がロンドンに去った後、身も心も憔悴してしまい、今までの活発さをすっかり失ってしまった Marianne を心配して、Dashwood 姉妹に共に行こうと誘う。ロンドン行きは Marianne には気分転換になるとの気遣いであった。Elinor は気が進まなかったが、Willoughby の翻意の真相を確かめるまでは納得のできない Marianne が一も二も無く行くことに賛成するので、付き添いとして同行する。Marianne はロンドン到着後すぐに、彼に会いたいと手紙を書くが、全く返事がない。

ある舞踏会で偶然 Dashwood 姉妹は Willoughby の姿を認める。Marianne はやっとの思いで Willoughby に再会し、舞踏会場で公衆の面前で、場所も弁えず、大声で彼の名前を切実な想いで、愛しげに呼ぶ。激しい情熱のために，社交上の礼儀を無視して，無防備な姿を露呈する(10)。だが、 彼の態度は彼女の期待を完全に裏切った。彼女に首たけだった Willoughby は着飾った令嬢との話に夢中で、Elinor に軽く会釈しただけであった。Marianne には、目を向けようともしない。業を煮やした彼女はどうして手紙の返事をくれないのかと問い質すが、彼は手紙を受け取った事実を認めただけで、後は無視してしまう。その刹那、彼女は真っ青になり、病的な興奮状態になってしまう。Elinor は妹が半狂乱のように彼を追いかけるのを、引き留めておくのがやっとであった。

その後、Marianne は自分の世界に引き籠もって、塞ぎ込み、誰とも会おうともしない。彼女は愛情において熱烈であったように悲嘆でも激しく、姉の慰めや同情を受け付けようともしない。感情に溺れて、自分を護ろうとする努力を放棄している。遂には世間はみな敵であって、私を嘲笑し侮辱しようとしていると自暴自棄になって言い張る。Marianne が誇ってきた sensibility は、今まで、無視し軽蔑してきた社会に対して実際は無力であった。積極的に現実に立ち向って自己を守ることのできない一種の逃避的な敗北主義であり、駄々を捏ねる幼児のような姿を示す。Lucy の婚約の告白に大きな衝撃を受けている Elinor が自らの感情を抑えて、一生懸命妹を励ましているのに、妹は自己を失って、半狂乱の態である。ここでは sense に比較して sensibility が、現実を洞察する知性と勇気、自主性を守り抜く精神の強靭性に欠けており、批判されている。程なく、Willoughby からの手紙が

届いた。自分は Marianne の家族に敬愛の念を抱いていたが、それ以上のものではない。数週間後には結婚する(II, vii)、というこれまでの 2 人の間柄からしてみれば無礼な文面で残酷な内容であった。Marianne はこの手紙を見たときに、彼との愛の終焉を理解せざるを得なかった。

暫くしてこの衝撃から平静を取り戻したとき、Elinor は妹に Willoughby と婚約していたのかと、ずっと心に掛かっていたことを聞いた。妹は、深く愛し合っていたので婚約などという社会的形式などは必要ないと思っていた、と答え、Elinor を失望させる。愛情が順調に育まれている場合は問題ないが、少しでも障害が現れると、この社会的形式が人の心を強く拘束し、結婚を履行する重要な要因になることを、sense の人 Elinor はよく理解していたが、sensibility が優先する Marianne には夢にも考えられなかった。しかし、同様に sensibility の人に属する Willoughby は自分の利益になる場合には sense を発揮し、Miss Grey とは、抜け目なく婚約後、結婚へと到っている。これも sense の機能の 1 つである。

偶然 Mrs. Jennings から、Marianne の惨状を知らされた Colonel Brandon は矢も楯もたまらず、姉妹の宿泊所に駆けつける。Willoughby に捨てられ、被後見人の Eliza のような境遇に貶められてしまうかもしれない Marianne のことが心配でたまらない。彼は最早、Willoughby の秘密を隠しておくべきでないと判断し、信頼する Elinor に、真実の Willoughby の姿を打ち明けにやって来た。自分の真摯な願いから話すのだということを彼女に充分に理解してもらい、彼自身迷い、混乱し、口籠もりながら、2 人の Eliza の悲劇を語り始める。

かつて、愛していたが、別れざるを得なかった従妹の Eliza Williams に託された彼女の私生児 Eliza は Willoughby に弄ばれて妊娠してしまった。この悲恋の顛末を、Elinor に打ち明けて、情愛の深さが Eliza に余りにも似ている Marianne が、Eliza のような悲劇的な結末を迎えないようにと心配したのである。大佐は Elinor の中に分別だけではなく、真正なる感性を見出した。自分の苦しみ抜いた気持ちを打ち明けても、ただ言葉で理解するだけではなく、心でも受け止めてくれる女性を Elinor の中に見たのである。大佐の寡黙な人柄の奥にこのような情熱と苦悩が隠されていた。オースティンはここで、大佐に混乱しながら揺れる感情を口頭で語らせており、彼が sensibility の人であることを表わしている。しかも、Willoughby の正体を明かしながら、Miss Williams とその母親の Eliza について説明する際、知らず知らずの内に、sensibility が作用し、Marianne への恋心を告白している。

Elinor が大佐が話してくれたことを Marianne に伝えると、妹は涙に咽びつつも Willoughby の本質を理解し、大佐の誠意を認めるようになる。sensibility に高い価値を置き過ぎる Marianne は自らの失敗を通して、徐々に生き方を反省するようになってきている。

Elinor たちのロンドン滞在中、Steele 姉妹も来ていた。Lucy が Elinor に代わって、Mrs. Ferrars の相手を買って出たので Elinor は余り令夫人の相手をする必要はなかった。Edward の結婚相手に金持ちの令嬢 Miss Morton を考えている Mrs. Ferrars に対し、Edward と秘密裏に婚約している Lucy が機嫌を取っている。Edward を間に相対立する思惑の者が真意を隠して表面上穏やかに交際

している。互いの本音が明らかになるまでの、束の間の平和であった。危うい平穏な時間が流れていたとき、突然に真相が発覚した。Mrs. Ferrars と近付きになるにつれ、つい警戒心が緩み、長女の Anne は妹 Lucy と Edward の婚約を洩らしてしまう。Mrs. Ferrars は激怒し、経済格差が激しい Lucy との婚約を即座に解消せよと Edward に迫る。そのような理由で、婚約は解消できないと主張する彼は勘当され、一切の生活援助の途を断たれてしまう。これで、Edward は金に目が眩むことも、他人の意見に左右されることもなく、愛の誓いに忠実に従う信用の置ける人物であることを、身をもって証明した。

Edward と Lucy の秘密の婚約が発覚したことを、Elinor は穏便に Marianne に知らせる。彼女は Edward を責めるが、この事実を知りながら、Elinor が 4 ヶ月も秘密にして、1 人で耐えていたことに驚く。更に、Elinor が Lucy の秘密を守る義務感と家族への思い遣りから自分の悲しみを抑えようと必死に努力してきたことを聞いて、同じ境遇にいながら、悲しみをいたずらに助長してきた、自分の無分別な振る舞いを反省する。オースティンはここでも 2 人の姉妹の態度を対称的に描き、2 人の性格を印象的に読者に伝わるようにしている。

Colonel Brandon は Edward が経済的に困難になったと聞いて、デラフォードの聖職禄を提供すると申し出た。彼とは余り面識がないが、Elinor に対する友情からの好意である。Elinor に、彼女から彼に伝えて欲しいと依頼する。Elinor としてみれば、彼は恋敵の Lucy のものになるのだから、彼らの便宜を計るのは辛い立場である。だが、彼の幸せを願う気持ちが強く、大佐に尊敬と感謝の念を感じ、その申し出を引き受けて、彼に聖職禄のことを直接伝えた。その上、健気にも her unceasing good wishes for his happiness in every change of situation that might befal him (III, iv)を表明する。自分の愛は報われないのにその悲痛な心を胸中に隠し、このような真心の籠った言葉を述べられる人物はオースティンの作品の中でも，恐らく Elinor だけであろう。

Marianne は体調が優れず、1 日でも早く田舎の静かな暮らしに戻りたかったが、馬車の都合で、途中に、Mrs. Jennings の下の娘 Charlotte Palmer の嫁ぎ先である、クリーブランドに立ち寄ることになった。失意の彼女は体力を消耗し切った状態でいたので、重症の感染症を発病してしまった。Mr. Palmer は急いで、赤ん坊を連れて親戚の家に避難した。邸宅に残っているのは、Dashwood 姉妹以外には、Mrs. Jennings、Mrs. Palmer と召使いだけであった。Elinor は彼女の容態の悪化を伝えて、Colonel Brandon に相談した。早速、大佐は Mrs. Dashwood を呼びに行った。Mrs. Jennings も Mrs. Palmer も彼女の病床を離れることなく、真摯に看護に手を貸してくれた。大佐が Mrs. Dashwood を連れて来てくれたお陰と、姉や周りの人々の助けもあって、彼女は回復に向かい、バートン・コテージに帰宅できた。

Marianne は落ち着くと、自分の無分別と人に対する思いやりのなさを反省し、自分を手厚く看病してくれた人々に感謝した。Willoughby については、 “As for regret, I have done with that, as far as he is concerned.” (III, x)と言う。ここで大事なことは Marianne が周りの人たちの気持ちが分か

るようになったことである。生死を賭けた病魔との格闘の中で、堅実に考えられる落ち着いた女性へと変貌を遂げた。

Marianne が病床にあるとき、Willoughby は彼女が大病で、命も危ないと知り、彼女を騙し、傷つけた全てを謝罪しようと駆けつけた。応対に出た Elinor に自分の事情を説明し始める。

彼女と付き合っていくにつれて、何時の間にか彼女の魅力の虜になってしまった。しかし、今までの放蕩生活が祟り、Miss Williams との不祥事が発覚し Mrs. Smith の知るところとなって、財産分与を受けられなくなってしまった。最早、破産状態の彼は金持ちの Miss Grey と結婚するしか救済される道がなかったのである。

Elinor は Willoughby の魅力的な容姿や快活な態度、Marianne を想う切実な訴えに、次第に心を動かされ、妹の惨状を招いた彼に同情心も抱く。余りに早くの経済的独立を許され、怠惰と放蕩と贅沢の習慣が身に付いてしまい、心と人格と幸福まで深い傷を負うことになってしまった。彼の話を聞いているうちに、Elinor の心は sense より、sensibility が働き、彼の男性的魅力に影響され、同情心を抱いている。

"You are very wrong, Mr. Willoughby, very blamable," said Elinor, while her voice, *in spite of herself*, betrayed her compassionate emotion. (III, viii)　(italics: mine)

Elinor は Willoughby を言葉では断罪していながら、声はその言葉を裏切って同情の響きを帯びる。in spite of herself と、オースティンは Elinor の sensibility を表出する。彼は持ち前の sensibility を駆使し、Elinor の sensibility に強い影響を与えている。彼は経済的に逼迫して、負債で身動きが取れないが、身に付いた贅沢な生活は捨てられない。優しい心を持つ、美しい女性と恋をしたいし、結婚もしたい。金持ちの Miss Grey は性格が良くないが、金銭的に裕福でない Marianne は美貌で、優れた人間性を持っている。女性として優れている Marianne に夢中になったが、金銭の負債が彼にこの恋を許さなかった。彼は基本的には sensibility の人であるが、厳しい現実の前では心情的な行動は許されず、sense を優先することを余儀なくされた。この様に読めても、オースティンはそれをうまく説明ができていない。Willoughby は真実の愛を取り逃がした。今後は、贅沢な生活を維持していくために、わがままで自分勝手な Miss Grey の相手を一生続けていかねばならない。ここでは、sense を代表する Elinor が sensibility に大きく影響されており、sensibility を行動原理にしている Willoughby が経済的な sense を働かせて、自分の生活を守っている。ここに示される sense と sensibility の交差が興味深い。

しかし、Elinor の気持ちの揺れは Marianne を前にしては現れなかった。Elinor は Willoughby が訪ねて来たことを話すのに、彼の行動は徹頭徹尾利己主義(selfishness)に基づいていると言い切る。姉の説明を聞いて、Marianne は自己の考え方の誤りを完全に悟る。Elinor が"His own enjoyment, or

his own ease, was, in every particular, his ruling principle." (III, xi)と言うと、Marianne は"It is very true. *My* happiness never was his object."と述べる。

彼女はこれまでの世間に対する非礼を反省して、Elinor の sense を受け入れるのである。このように自己覚醒して死の床より再生した。オースティンは Marianne の sensibility を Elinor の sense に従わせることに成功した。

物語は大団円に一気に向かって進んで行く。Lucy との婚約が原因で、Edward は Mrs. Ferrars の怒りを買い廃嫡される。Lucy はお金のない彼には用はないと彼を捨てて彼の弟 Robert Ferrars と結婚してしまう。この知らせを持って、Edward はある日、Elinor にプロポーズにやって来る。それを聞くと、彼女は突然の喜びの気持ちを堰を切ったように溢れ出した嬉し涙で表現する。Elinor は Edward から，やさしい揺るぎない愛情を告白され、無上の幸せに浸った。彼女は感情を露わにするが、それはもともと彼女の内面にあった sensibility が姿を現しただけのことで、彼女の内面変化を示唆するものではない。

She [Elinor] almost ran out of the room, and as soon as the door was closed, burst into tears of joy, which at first she thought would never cease. (III, xii)

ここで象徴的なのは部屋から走り出たという彼女の行為である。彼女にとって、ずっと sense で戦い、ついに手に入れた愛への喜び（sensibility）の発露は隠れて流す涙である。彼女にあるのは、飽くまでも sense の範囲内での sensibility である。

Elinor は経済の安定を求めて、Edward に母 Mrs. Ferrars との和解をさせる。詫びを入れて、結婚に同意をしてもらう。彼は、1 万ポンドを与えられ、生活に充分な収入を確保した。Elinor はここでも sense を賢く発揮している。

次は、当然 Marianne の結婚である。周囲の状況は既に整っている。オースティンは Marianne に共感しているからこそ、彼女の Willoughby とのロマンティックな恋を成就させなかった。彼女を幸せな結婚に導くために、重病という罰を与えて、分別のある体制順応者にしたのである。オースティンは Marianne の結末に関して、かなり苦しい言い訳をしている：

Marianne Dashwood was born to an extraordinary fate. She was born to discover the falsehood of her own opinions, and to counteract, by her conduct, her most favourite maxims. (III, xiv)

母、Elinor、Edward の総意は、They each felt his sorrows, and their own obligations, and Marianne, by general consent, was to be the reward of all. (ibid.)ということである。この状況では、Marianne に残された道は Colonel Brandon との結婚しかない。結局、35 才過ぎのフラノのチョッ

キを着た男性の 2 度目の愛を受け入れ、デラフォード領主夫人となる。ここにオースティンの Marianne への肯定が見られ、 sensibility は完全に矯正され消し去られるべきものではいないことが分かる。

1 個の人格において、sense と sensibility は配分のバランスが重要であり、いずれかに極端に偏ると、社会的人間関係に大きな影響を生じる。殊に、sensibility が過多であると、周囲との摩擦が大きいし、sense に過度な重きを置くと、人間的魅力が減少し、影の薄い印象を持たれ勝ちとなる。オースティンは sense を基盤に置いて、社会規範を逸脱しない sensibility の表出が望ましいと考えているのであろう。sensibility は語源的に sense から派生した語であれば、sense の原義から大きく離脱するのは不可能である。オースティンが正反対の対立する概念ではなく、通底する意味を持つ 2 つの語を並べたのは、両者が互いを否定し合うのではなく、sensibility を sense の制御下に置いて、程良い均衡の現実的例として、ここに Elinor と Marianne に実践させたと言えよう。

Marianne could never love by halves; and her whole heart became, in time, as much devoted to her husband, as it had once been to Willoughby. (ibid.)と述べられているように、その心情は sense に傾いたとは言え、持ち前の sensibility を発揮し、彼女の心は直ぐに夫に寄り添っていく。

Elinor と Marianne の仲の良さは勿論のこと、夫同士もお互いの人格を認め合っており、2 組の夫婦は幸せな家庭を築いた。

注

(1) Brian Southam: *Jane Austen*; Burnt Mill; Longman Group, 1979, p. 35 当時の若い女性にとって結婚がほぼ唯一の生活手段であったという厳しい状況を述べている。

'Marriage has … no *natural* relation to love. Marriage belongs to society; it is a social contract.' Other than marriage, no career or occupation was open to her. Her education was a grooming for polite society, providing her with fashionable 'accomplishments' to catch the eye of a future husband.

(2), (3) 以下の 2 つの記述で本作品の成立事情が窺える。

James Edward Austen-Leigh: *Memoirs of Jane Austen*; Oxford: Oxford University Press, 1967, p. 49

'Sense and Sensibility' was begun, in its present form … in November 1797; but something similar in story and character had been written earlier under the title of 'Elinor and Marianne.'

R. W. Chapman: *Jane Austen, Facts and Problems*: Oxford at the Clarendon Press, 1970, p. 42

But the *Memoir* knew of an earlier form of *Sense and Sensibility*, called *Elinor and Marianne*…. Caroline Austen wrote, … Sense and Sensibility was *first* written in letters….

(4) Jane Austen: *Jane Austen's Letters to her Sister Cassandra and Others*, ed. R. W. Chapman; London; Oxford University Press, 1964, pp.272-273

A letter to Cassandra Austen, 25 April 1811

…I am never too busy to think of S&S (Sense and Sensibility). I can no more forget it, than a mother can forget her sucking child;… I am very much gratified by Mrs. K's interest in it;… I think she will like my Elinor. と *Sense and Sensibility* のことが常に頭から離れないと、作者の本作品に対する愛着振りが示されている。

(5) A. Walton Litz: *Jane Austen*; New York; Oxford University Press, 1965, p. 73

…we must regard *Sense and Sensibilit*y as a youthful work patched up at a later date, in which the crude antitheses of the original structure were never successfully overcome.

(6) Alistair M. Duckworth: *The Improvement of the Estate*; Baltimore; The Johns Hopkins Press, 1971, p.111

Elinor accepts the validity of social institutions and acts within received principles of ethical and social conduct.

(7) Jane Austen: *The Novel of Jane Austen*, vol. I, *Sense and Sensibility*, ed. R. W. Chapman, rpt. Oxford; Oxford University Press, 1967

Sense and Sensibility からの引用は、以後、チャップマンの区分に従って、本文中に記す。(I, i)は第 1 巻第 1 章を表す。

(8) David Monaghan: *Jane Austen, Structure and Social Vision*; London; The Macmillan Press, 1980, p. 50

Marianne places great faith in her subjective responses, regardless of the poverty of evidence on which they might be founded.

(9) Moreland Perkins: *Reshaping the Sexes in Sense and Sensibility*; London; University Press of Virginia; 1998, p.74

このときの Elinor の分別ある対応が次のように述べられている。

Both her intellectual and her moral disposition as well as her love for Edward and her observations of Lucy – and her personal pride – ensure that she shall quickly attempt to conceal from Lucy her own pain, turn to analysis, clear Edward of blame, condemn Lucy yet affirm Lucy's right to Edward, set herself upon a course of honorable withdrawal from romantic connection with Edward, and hide from her family both the new facts and her distress.

(10) Jane Nardin: *Those Elegant Decorums*; Albany; State University of New York Press, 1973, p.27

本作品では婚約前の女性が男性に手紙を書くことと、恋愛関係にあることを他人に知らせることは禁じられていると、述べている。

Two major rules which are important in *Sense and Sensibility* are the prohibition on writing letters to a man to whom you are not formally engaged and the injunction that a love affair ought to be concealed as far as possible until it culminates in a proposal.